令和2年度第1回社会教育委員会議事録

日時

令和2年7月1日（水） 10:00～11:30

場所

四万十町役場東庁舎2階 町民活動支援室

議題

- (1) 委嘱状の交付
- (2) 委員長、副委員長の選任
- (3) 令和2年度四万十町教育行政方針について
- (4) 令和元年度実績及び、令和2年度社会教育事業計画について
- (5) その他

(谷口委員長)

みなさんのお手元のほうに今日の社会教育委員会の資料を送っております。この中で全部読み上げていくと非常に時間がかかるため、読んだもので気づいたところ、ここ聴きたいなとそんなところを抽出して意見を述べてもらい、その答えをもらうということと、特に方針で教育委員会のほうから特別にこういうところを新年度やり始めるという箇所については説明してもらおうという形でやっています。そこをご理解の上、質問をしていただきたいですが、いかがでしょうか。

(坂山委員)

実績のほうも大丈夫ですか。

(味元副課長)

大丈夫です。

(坂山委員)

学校関係のところでは少しお聞きしたいです。放課後子供教室のところでは意見は後で言わせてもらいます。成果と課題のところの成果の2行目に子供の安全な確保・様々な体験学習等の学習機会の提供が図れたとありますが、様々な体験学習等の学習機会の提供というのは具体的にどういったことがあったかお聞きしたいなと思います。

2点目は、学校地域支援本部事業の成果と課題の部分で、適正配置等の問題で設置できるか

協議が必要とありますけど、学校地域支援本部事業とコミュニティスクール、学校運営協議会、これと適正配置等の問題がどういう関係があるのかわからないのでお聞きしたいです。県教委と聞いている話と少し違う気がしております。

(林課長)

まず、放課後子供教室のところですが、さまざまな体験学習というところですが、各教室によっていろんな体験をしていただいております。例えば、食育、子供食堂的に春休みなどと一緒にご飯を作って食べるというような体験学習もしております。それ以外にも各放課後子供教室が地域に根差した活動を行っているということを聞いております。それと、学校地域支援本部事業ですが、前段の支援から協働へという基本的な考え方で地域学校協働本部事業としていきたいというのが従来からの県、それから文科省の考え方です。それに合わせてコミュニティスクールを設置してもらいたいと、この事業を受けるなら一緒に設置してもらいたいというのが県の考え方で、いまのところまだ絶対条件にはなっていないですが、そういう形で2件は誘導していきたいと説明の中に入れておりました。適正配置の問題で設置できるのかというところなんですけど、適正配置の方でいろいろな話をしておりますので、今後コミュニティスクールも含めて新たに立ち上げるのかどうか適正配置の進み方によってはだいぶ変わってくるというところで協議が必要という表記になっていると思います。

(坂山委員)

わかりました。まずあの放課後子供教室ですが、私の家の前にもあるのですが、子供の安全確保についてはすごく良くてよくやられていると思います。放課後の時はそれだけでいいと思うんですが、土曜日とか夏休みの子供が一日おりますよね。その時に朝から晩まで宿題やったり遊んだり、子供食堂をやっているとおっしゃられてましたが、もったいないなと思うんですよね。かなりの数の子どもが長時間一緒に居るので、子供たちのためにも何か教育的な活動が出来たらいいかなとおぼろげに考えていて、ちょっと指導者の先生にやってみませんか、目的を持った活動をですよね、土曜日とか朝から晩までおるがですよ。あれだけ子供が長時間居るので、ちょっと一歩踏み込んで、何かやったら活動ができるんじゃないかなと思っていて、ここに書いてあったんで、先進的にやられている活動を聞いて、持って帰りたいなと思ってお聞きしたところなんです。聞いてみると影野の方でも絵をかいたり、夏休みに本を読んだり、何回かはやっているようですが、ちょっとそういうところできないかなと。

2点目の学校適正化について、学校地域支援本部とコミュニティスクールは全く性格が違うので文科省は二つ作れという風に言ってきてますが、県のほうは、2、3年は一つでいいですよ。うちは二つ作りました。コミュニティスクールというのは学校運営に係る意見を言わせていただく、ゆくゆくは両方作らなきゃいけないんですね。それは適正配置とどう・・・教頭ともどういうことやろうかねと話したんですが、これから適正配置で学校がなくなるの

で、コミュニティスクールとかそういう組織は作らなくていいよという意味だったら、昨日も事務所の人が来てやりましょうと話が進んでいるので、それと矛盾にするんじゃないかなと、あるべき作るべき、それにこれからですよ、社会教育というのが社会人のため教育だけじゃなく、教育方針でもあるように社会を生き抜く力が子供たちはいるんで、いわゆる入試的な、学力だけじゃなく、生きていく力、というのはやっぱり社会とかかわる力、学校として子供たちが社会とかかわる教育を非常に大事なところなんですよね。そういう教育を学校教育課と生涯学習課、社会教育のそういう面がこれから必要になってくると思います。この事業はどんどんどんどん進めていくべきじゃないかなと個人的に思うんです。学校は学校、社会教育は学校を終わった人だけじゃなくて、子供たちが社会とかかわってどんな勉強をしていくかというのがこれから重要なところになって、生きる力をはかっていくと思うんです。学校に地域の人が来ていろいろ教えてくれる、そういうことだけじゃなくて、子供たちが地域に出て、自分たちができることを見つけて活動していく、そこから学んでいくのがこれからすごく大事になってくると思うので、そういうことを教育委員会として活動を推進していただきたいなと思っています。以上です。ここで決めていただくことはありません。

(林課長)

放課後子供教室のところなんですけど、これは基本的に放課後児童クラブと放課後子供教室と2種類あって、放課後児童クラブは厚生労働省管轄のいわゆる学童保育、もう一つの放課後子供教室は文科省の管轄にあって、それについては基本的に地域の人が見守りを行うというようなスタンスで運用をしています。その中に指導に入るのが制度の成り立ち上、そこまでお願いできるかとなるとなかなか厳しいところがあって、指導者のやる気にゆだねられる部分があります。放課後児童クラブは厚生労働省の管轄で保育士の資格を持った人であることが入ることになっていますので、そういった形で指導とか一緒にお勉強するとかいうようなところまで入り込めるような制度になっていますけど、制度の違いがあり、各教室によって取り組みが変わっているというところがあります。特に四万十町の場合は学校数が多いので、そういうところでいろいろな特色を持った取り組みが行われる形になっているところですよ。

学校地域支援本部事業やコミュニティスクールについての関係なんですけど、今コミュニティスクールをやっているところが影野と米奥だけだったと思いますが、全部作ってもらいたいというのが文科省の考え方やろうとは思いますが、そこを立ち上げていくというところを、適正配置でいろいろ考えているところに、その負荷までお願いできるのかどうかというところも教育委員会としてのジレンマがあるというところですよ。

(谷口委員長)

他に意見はありませんか。

議題の3, 4を一緒にやっているところですが、教育委員会のほうから議題の4について説明が必要な部分はありませんか。

(林課長)

簡単に大きなところで、昨年度と変わったところ説明させていただきます。文化講座についてですが、これは従前夏期大学としてやっておりましたが、なかなか今は地方のほうから先生をよんで、四万十会館で500人集めるというのが、集まりにくいし、そういうニーズがあるのかというところで、もうちょっと身近なところでやっていこうというところで、浴衣の着付け教室だったり、奈路で一昨年発見された、江戸末期から明治にかけての行政文章が大量に発見されましたので、それをふすまからはがすワークショップやそれを読み解くワークショップをおこなって、すごい好評でした、出来るだけ参加型の夏期講座をやっていきたいと考えているところです。続きましてわんぱく学校と四万十町青少年育成会議との連携とありますが、わんぱく学校、窪川町の時代からありますが、昨年から若干考え方を変えて、出来るだけ地元でふるさと学習の一環としてやっていこうということで、4, 5年生は室戸で宿泊して、それ以外については基本的に町内、四万十川や山を題材とかいうような形で地元のふるさと学習のメニューをやり始めております。今子供たちは非常に忙しいので、若干参加者数が少なくなっている、特に大正十和の子どもたちが少ないのが現状です。今年についてはコロナの影響で宿泊研修がなかなか厳しいので、夏休み以降に日帰りでのこのような体験活動を予定しております。青少年育成町民会議というところで補導センターを中心にやっております、これも同様に体験活動をやっていただいています。これについてもふるさと学習を中心としたような、地元を根差した活動を取り組んでいるところです。今年度についても、わんぱく学校と四万十町青少年育成町民会議で連絡を取り合いながら、四万十川対策室とも連携を取りながら進んでいきます。あと生涯スポーツ推進事業・生涯スポーツ団体等の支援というところなんですが、従前からスポーツクラブのほうに事業を委託してやっていただいております。B & Gのほうに指定管理業務として、引き続きやっていく予定です。生涯スポーツ団体等の支援というところで、昨年度3月末に桜マラソン大会、昨日総会がありまして昨年度の結果を聞いたところですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため残念ながら中止ということになりました。今年度についても新型コロナウイルス感染症の状況を見つつ、判断していくという状況で、楽観視できない部分があるということです。続いて、国・県文化財の活動というところで昨年度新たに認定を3件、解除を3件、解除については物がなくなるとか、後継者がいないということで解除になっているものや、十和の大井川の庄屋屋敷については、復旧が難しいということで指定を解除したということです。それと昨年からです、旧昭和村役場については文化財としては指定していませんが、解体するというので、何度か文化財保護審議会の方で協議しまして、出来るだけ記録としては残していくというところで解体していくと、現在記録についての報告書を待っている最中で、それを待ってから解体する予定です。ほかに昨年度については現在、小嶋

保育所を建設しております。小鳩保育所の用地がちょうど埋蔵文化財の包蔵地でしたので、そこについては試掘調査を行いました。重要文化的景観保護活用事業については、昨年協議をしたのは風力発電について、景観的な見地からどうかというところでオリックスのほうから説明をいただき、協議をしました。まだ様々な調査活動がありますので、最終的な結論は出ておりませんが、必要であれば、重要文化的景観整備管理委員会のほうで今後も協議していきます。ジップラインについて協議をし、若干届け出が送れていた部分もありますが、進めていく方向です。図書館美術館管理運営事業と文化的施設整備事業は引き続き行っております。文化的施設整備事業については、昨年基本計画ができて、基本設計業者が決まったというところで、またその他の部分で報告をさせていただきます。保育については、引き続き保育を実施していくと、それと今年の10月から3歳児以上の保育料が無料化になりました、小鳩保育所の建設が今年の2月から立后式があり、今年度中に竣工という段取りになっています。生涯学習課からの報告は以上です。

(谷口委員長)

ありがとうございました。今林課長のほうから実績及び事業計画について説明をいただきました。重点的に、力を入れているところを説明していただきましたが、この件について、何か説明はございませんでしょうか。

(金子副委員長)

2つあります。一つ目は、文化講座の課題の部分で、特に若い男性の参加者が少ないと書いてありますが、ゆかたの着付け教室なんかは女性限定でしたっけ。この企画のチラシを見たときに女性限定だった気がします、なんとなく。自分が着物の着付けをしたくて見たときに女性限定化とがっかりした記憶があった気がします。

(味元副課長)

写真が女性の写真を使用していたので、特に女性限定というわけではなかったんですが。男性の方も是非とも参加していただきたいので、そこらへん分かりやすいやり方に変えていきます。

(金子副委員長)

よろしく申し上げます。2つ目は図書館の職員さんのことなんですが、司書とか学芸員さんについて、やっぱり会計年度さんで賄っている状態ですので、文化的施設もできますし、正職員とか、資格を持った司書や学芸員さんがいるような状態にしてほしいです、前から思っているんですが、雇用の在り方について検討する必要があるとかかかっているんで、ぜひぜひそうしていただきたいです。

(林課長)

ありがたい、応援のような質問ありがとうございます。図書館美術館については、非正規雇用がだいたい窓口対応の主になっているというところで、官製ワーキングプアじゃないかというようなご意見も出ているようなところではあります。ただ、6月議会でも様々な議員の一般質問の中でも今後できていく文化的施設のランニングコストの問題も含めて十分協議していくようにという宿題も出ておまして、うちとしては正規雇用の学芸員であるとか司書の方を専門的な見地からお仕事をしていただきたいという希望はありますけれど、そういうところも含めて、十分にみなさんに理解をしていただいているということになっております。できるだけそういう部分の期待には応えたいというのが担当課としての回答です。

(谷口委員長)

よろしいですか。はい、他にはありませんか。

(中協委員)

教育行政方針の3つめに学びのセーフティネットの構築というのが大綱としてあります。子供たちが困らないように、環境に左右されない学びのセーフティネットということで、多分予算的にもつけているものとか、重きを置いているものとか、全般的に教育相談もそうでしょうし、保育行政もそうだと思うのですが、四万十町の教育委員会としてここをすごく大事に思っているとか、そういう子供たちのセーフティネットということで心にとめている事業とかがありましたら、自分たちも意識していくので教えてほしいです。もうひとつが、各種団体への支援・補助金というところなんですけど、前年度については予算額も決算額もきれいに使えておりますが、今年度はコロナの影響もあって、ほぼどの団体も活動ができていないかと思うんです。補助金の使い方が今年はなかなか難しいだろうなと私も思うんですが、四万十町の教育委員会として今後補助金団体への補助金の出し方の考え方というのを教えていただけたらと思います。

(林課長)

教育行政方針の質問については、基本的方向性の中に学びのセーフティネットの構築とありますが、学校教育の面でも様々なことがありますけど、生涯学習の面では、たとえば、新しい学習サイクルの研究、ケーブルテレビを活用した学習支援というようなものであるとか、子供の健全育成の推進、これは青少年健全育成事業に当然含まれておりますし、通学路や遊泳場等の危険個所の発見とか、教育環境等の整備や児童生徒等の安全確保のところ、社会教育施設の耐震であるとか、学校及び児童福祉施設等の安全確保というような面でのことについても教育行政方針で書いております。その他学校教育については町内高校在籍生徒への支援であるとか、奨学金への支援であるとか、要保護及び準要保護児童生徒への支援で

あるというような部分についても項目に挙げて様々な計画をしているところです。

もう一点、補助金について、非常に悩ましい質問なのですが、大きな課題として、事務局体制をどうするのかというところと、それから補助金の額についても考え直していくというような補助金に対する町のプロジェクトチーム、補助金のあり方という方向性が出されました。3年をめどに考え方をはっきりしていくというところです。大きく補助金といっても事業をするために、営業活動を伴う事業に対する補助金というやつと社会教育という営利を目的としない補助金と2種類あるので、そういうところの考え方は整理して、出すところは出さないといけないというのが担当課としての考えているところです。それと事務局とか会計であるとか、各補助金交付団体、特に、しっかり事務局体制ができているところはかまわないが、特に社会教育団体についてはそういうところが、例えば文化協会についてもなんとかならないだろうかという話もいただいております。そういうところで、町としても、一体的にすべてをやってもよいのかというところは検討しているところです。そのことをどんどん推し進めることによって今までできている社会教育活動ができなくなるのは本末転倒ですので、そこらあたりはそうならないように支援すべきところは支援するというのが生涯学習課の考えていることです。お金も出して人も出して二重の支援じゃないかというのは財政であるとかそういうところの考え方ではありますが、そうではないというのは担当課として訴えていきたいと思います。

(山協教育長)

学びのセーフティネットについて、やはり四万十町で育つ子どもたち、特に家庭環境は地域によって差がつかないようにというのは根底にあります。まず、学校については家庭でも勉強できる環境、例えばICTを活用した家庭学習、環境は整えていこうと、一人一台の時代がもうすぐやってきます。そして学校内は、しっかり子どもたちに向き合える時間を確保できる教員の確保、大きくは適正配置計画になります。町内で厳しい環境の方が、地元の高校に上がられていますので、そこは今支援をしています。たとえば子どもであれば、先ほど坂山校長もおっしゃっていましたが、これから見守りだけでなく地域の力を得てあらたな学習体験ができる環境も作っていかねばと思います。現在、これだけ子供、児童生徒の人数が減る中で、いろんな事情により支援が必要な生徒が目立ってきています。学校も大変ですので、学校にお任せだけでなく、家庭教育が大事だと思いますので、そこらへんも地域の力が何らかで得られる形で今後取り組まなければと思っておりますので、学びのセーフティネットが一番大事なところですので、また委員さんのご提案や、ご指摘なりをいただければ、今後、ここは大事なところで、教育委員会内部も含め、組織としてかかわっていかないといけないと思いますので、ご意見をよろしくお願いします。

(坂山委員)

先ほどの教育長の意見で気になるところですが、子供と向き合う時間が適正配置するとで

きるというのは反対だと思うんですよ。適正配置して大きいところ行くと、生徒数が増えた割には配置される先生の数は変わらない、今の小規模校のほうが、子供との時間がとれるのは間違いないです。数字的なところで、ちょっと先生が増えるかもしれませんが、子供の数も増えますので、それはちょっと違うんじゃないかと思うんですが、どうでしょう。

(山脇教育長)

自分も適正配置がすべて正解だとは思ってません。現に、影野小学校も含めて、小規模でなく、極小規模の、学年に一人とかの生徒が切磋琢磨できる環境ではないと思います。環境だけで見れば、先生がたにはしっかり見守っていただけてますけど、今後社会に出る児童生徒があまりにも少ない固定化・序列化した中ではなかなか難しいだろうということで、社会に開かれた学校支援地域本部とか施策があるわけですけど、やはり一番は子供だと思います。それで窪川の子たちは窪中へ行きますが、窪中に行けば一定の人数はおりますが、ただ小学校であまりにも人数が少ない関係でいろいろ課題とか問題もあるのは事実ですけど、その中であまりにも極小の学校は、校長を入れて四名の先生では、先生の人数が少ないきというわけではないですが、他の事、いろんな公務も重複してやらないかん、働き方改革と子供のまなぶ環境がセットで見直していかなければいけないと思いますので、適正配置がすべてとは全然思っていません。自分も完全複式で育った人間ですので、複式を否定するつもりもありませんし、そこは地域とも含めて、先生が先ほどおっしゃられたように地域の核となる学校で、これから活性化も維持していかなければならない時代ですので、そこはまた協議を進めていきたいと思います。

(坂山委員)

その話は置いておきましょう。適正配置でいろいろあるのは。私が言いたかったのは、セーフティネットとって、子供と向き合う時間は適正配置をすると少なくなりますよね、とそこだけです。少ないけど、とか、統合の話はまた別の問題で。そこが気になっただけです。

(谷口委員長)

他に意見はないようですので、その他に移ります。その他でまた、話がいろいろ出てきてその中で又聞いてみたいことが出てきたらそれでもかまいませんので。それでは四万十町文化的施設基本計画の話をお願いします。

(味元副課長・林課長)

—資料説明—

(谷口委員長)

他にありますか。

他にないようですので、今度新任になってくれた委員さんが4名いるので、社会教育委員とはどういうことなのかという説明をお願いします。

(林課長)

お手元に社会教育委員の役割というA3の用紙をお配りしていると思います。それに準じて説明をさせていただきたいと思います。まず社会教育委員というのは何の法律に基づいているかという社会教育法に基づいております。この15条の中に都道府県及び市町村に社会教育委員を置くことができる。社会教育委員は、教育委員会が委嘱する。となっております。役割としては、「社会教育への理解を含め地域の課題や住民のニーズを把握し、それを社会教育事業に反映する役割を持っています。社会教育委員は社会教育委員として意見を述べるだけでなく、個々の委員として意見を述べたり活動したりすることができます。」というところで、具体的な役割としては社会教育に関する諸計画を立案することや定時又は臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じて、これに対して意見を述べることや職務を行うために必要な研究調査を行うこと、これは研修会などへの参加になると思います。教育委員会の会議に出席して社会教育に関し意見を述べるということが具体的な役割になってきます。どのような方が社会教育委員になっているかということに関しては、委嘱の基準は、学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者というものの中から、委嘱しております。右のページに高知県の状況があり、下の構成分野というところがあります。男女比もありますのでご確認ください。役割としては以上です。

(谷口委員長)

社会教育委員の役割ということで説明をいただきました。非常に広範囲になっていますので、いわゆる社会ですから、そういうところが雲をつかむような話ではありますが、まあこれを読んで理解してもらえばありがたいと思います。引き続き僕のほうから、社会教育委員研修日程についてという資料を見てもらいたいと思います。令和元年度の会議です。

—資料説明—

この総会を外して、5つの会議があります。この出席者を見てみるとほとんど事務局の方々にお世話になっているということで、せめて、コロナの影響によって時期が多少ずれてくるとは思いますが、5月31日と6月7日はなかったですが、日程がありご無理とは思いますが、四万十町の社会教育の雰囲気ですたらさないように、そのためにはいろんな会に出てもらって、その会でいろんな講演会をしてくれる人がおりますので、その話を持ち帰って、それぞれの立場で地域に携わっているところに活かしてもらえればそれも一つの社会教育の広がりだと認識しておりますので、一回くらいは出てもらえればありがたいと思いますので、協力していただければ助かります。

あともう一つ。中学校までは義務教育で高校からは違いますが、例年地元の高校への進学を

見ていると、非常に、僕なりに少ないと思います。四万十町の2校、四万十高校と窪川高校があるのに、地元の中学校からの進学率が低いんじゃないかと、今年は特に、窪川が低いのではないかと、非常にこれは憂うべき問題だと思うわけです。要は地元の高校がなくなれば、この3年間20人を切れば統合の話になってきます、なすがままの統合になってくるのか、あるいは地元の人が頑張っ、何とか地元において地域において高校をと、人数が少なくなるのはそれはやむを得んですが、窪川にしても四万十高校にしても、非常にクラブ活動を活発にいろんなことをして新聞紙上をにぎわせてくれています。そういうところになぜ魅力を感じないのかと僕らは単純に疑問を感じるわけですが、いわゆる中学校の意識がどっちにむいちゃうかと。市内を向いているかどうかかわからないけど、そこら辺を義務教育の中で、教育委員会がもう少し学校に対して、進学のことだから指導はできないとしてもいろんな努力をして、地元に残るような対策を講じていかないと、なすがままになっていると非常に大きな問題が生じて、地元逆に不便な状況を生んでしまう危険性があるかもしれないという事に憂いを講じているわけです。そこら辺の、新しく教育長が変わりましたので、どのように考えているか聞きたいと思いますがよろしいでしょうか。

(山脇教育長)

地元高校応援大作戦と銘打って自分がやってきた中で、今年度、令和2年度の入学者が一番少ないということで非常に責任を感じています。令和3年度、4年度と2年連続して20人未満の場合は1校に統合と県が計画を上げています。まさに令和3年度の入学者増にむけて待ったなしの状況で、中学校のほうにですね、いろいろとアプローチ等を強化していております。四万十高校については、ご案内のとおり、連携型中高一貫校ということで、中高一貫校でありながら、3割程度しかいっていない、今年度特に窪川中学校から窪川高校へは1割しかいっていないという状況で、生徒はいるわけですので、一定の人数がいれば県が示す20人以上の学年は確保できるというところですが、現状では県内の公立の高校の全日生が五千二、三百の定員のところが、三千八百人しか入学していない現状で、ほぼ定員割ればかりです。ということは希望すれば行きやすい環境ともいえます。やはり特に窪川地域の子どもはちょっとした通学気分、クラブ、都会志向的ところが親にもありますし、子供たちのなかでやはりどうしても須崎、高知のほうにというのが現状です。四万十高校の連携中でも同じで、やはり下宿とか寮がある環境を目指して出ていく状況、そういう家庭環境があれば行けるわけですけど、ただ先ほどのセーフティネット、なかなか厳しい家庭が地元でしっかり学べる場は確保せないかんところですが、現在の状況では大変難しい状況で、県の計画では令和5年度まで、令和3年度4年度2年連続の状況を見て令和6年度以降1校に統合するのか決まります。町としてはできるかぎり2校存続を目指して支援をしておりますが、やはりこれまでの我々地域の大人の意識の中ではやはり厳しい状況があつて、それがやはり児童生徒へ影響しているのが間違いないわけで、これを打開するには相当な、両高校へ魅力付けも必要だと思います。窪川高校は窪川中学校から3割なり4割なりいっていただ

けたらいいですし、四万十高校は昨年から県外募集をして、今年は5名、県外から来ています。寮がありますので、そこうまく、県外にも発信すれば、四万十高校も一定、20人以上確保できる見通しは立っておりますが、地元の児童生徒数がさらに少なくなりますので、将来を見据えた両校の魅力をどういう風に作っていくか、今いろいろ高校と協議もしながら進めているところで、まずは来年度20人以上ということで今町も高校とタイアップして取り組んでおりますし、中学校向けに様々なアプローチをかけておるのが現状ですが、厳しいのは間違いないです。教育の分野で地元は高校まである教育環境ですので、うまく、前教育長も言っていました、保育から高校までつながる何らかのビジョンを打ち出して、うまみ、強みをもっと作り上げていかなないとますます厳しい状況になっていくと思いますので、各委員におかれましてもいろいろとご提案をいただけたらと思います。よろしく願いいたします。

(坂山委員)

私も谷口委員長のいわれる通りだと思えます。中学校との連携だけでなく小学校、先ほどでしたが、保育園から小学校、子供と親の意識環境、子供たちが大人になってなりたい夢ってというのが漠然としていて都会のいい学校に行ったらそれは叶いやすいんじゃないかなと進学を決めることって多いと思えますね、いろいろな学校行く、高知に行くというのは子供の選択であっていいとは思いますが、そのなかに地元に残るという選択肢、積極的に入る選択肢を作ってやるべきだと思えますよね。それが今あるかなと。子供たちがなりたい夢があったらそれは窪川高校でも叶うよというなことを大人も見て子供たちに行ってくださいよね、それを実現させていく、なんとなくいけなかった子たちが窪川高校に行くというイメージがあるじゃないです、そういうのを払しょくさせたいですよね。教員の中にもやっぱり多少あると思えます、中学校の先生なんか特に、ええ学校入れたらええんだというような進路指導なんかそんな空気が垣間見える気がします、

(山脇教育長)

あります、学校同士でもいろいろありますので、その垣根を取っ払えるところは取っ払ってもう早く、言われたとおりに小さいころからの手立てをなにかしていかないと。

(坂山委員)

郷土教育やと思えますよ、キャリア教育。故郷を愛する心を育てていかなかないといかんと思えます。

(谷口委員長)

学校の先生には四万十町を大事にしてもらわないといけない。市内のほうに目を向けてはいけない。中学校の歴代の校長先生の進学の進め方というのを僕らも数多く聞いてますの

で、けしからんというふうに思うわけです。地元において地元の高校にあるのに、いける人は地元を大事にする、例えば梶原なんかは高校生が増えた、ほんで地元に残って仕事をしている、僕らは建設業をやっているけど、求人には困らないというんです、地元に残るから、どこに魅力があるのかというたら、そこら辺を考えていかないといけない、僕らも考えていかないといけないところですけど、やはり求人に対して不足はないという風に言われるので、そこら辺同じ市町村隣接しているところで何が違うのか、そういうのを大事にしてもらいたいし、ぜひともそういう風にしてもらいたいことを切に願うわけで希望したいですね。

(教育長)

ありがとうございます。さらに内部でも協議をしまして進めていきたいと思います。

(谷口委員長)

ぜひよろしくお願ひします。もうひとつ、文化財の今まで図書館と美術館ができて、それに展示していたのを民俗資料という風に位置付けてますけど、それぞれに残っているのをなかなか整理がついていないですが、それを計画して、もっと廃校のところにもって行って学びの場にするとか、一つの方向性を、文化財を整理してもらいたいと思います。計画的に整理して、四万十町の遺産として残していくという位置づけを取り組んで言ってもらえたらと思います。よろしくお願ひします。

他にご意見はありませんか。

ないようですので、これで閉会にしたいと思います。ありがとうございました。